

611.3-Se22㊦

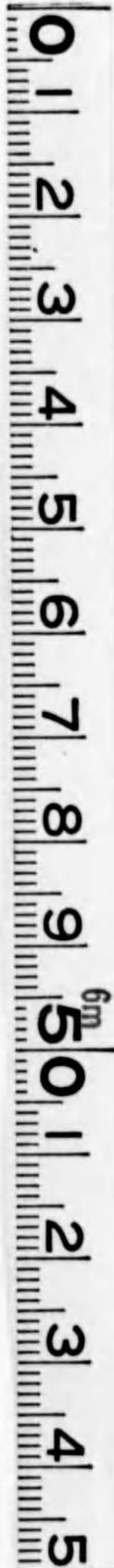


1200500748347

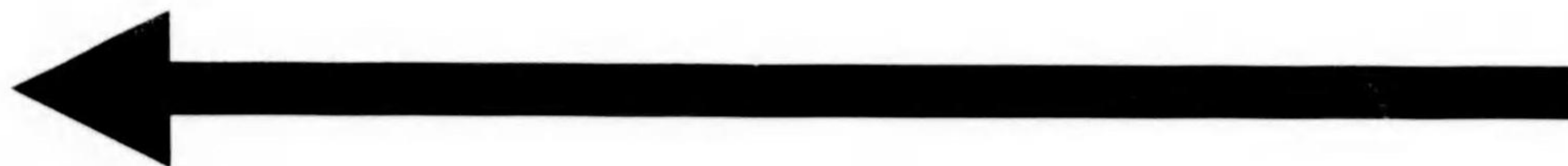
3
22

印度の食糧難

世界経済調査會編



始





967
306

和十八年十二月

印度の食糧難

世界經濟調査會

611.3
SE 22

はしがき

ベンゴール州を中心とする印度の食糧難に関する情報は、ビルマの獨立、自由印度假政府の成立、これに對應する敵側のビルマ反攻呼號等、印緬國境方面の形勢緊迫の際特に一般の視聽を惹きつゝあるところであるが、本稿は嘗て總領事としてカルカッタ在勤の經歷を有する本會客員宅哲二郎氏が、その豫てよりの印度に関する研究、知識を基礎として、右情報を解説的に取纏めたものである。



昭和十八年十二月

世界經濟調査會

967
376

目次

第一節 食糧難の實情……………一

第二節 印度食用農産の實勢……………八

第三節 今次食糧難の原因……………一八

第四節 食糧難を繞る社會情勢……………三五

第五節 食糧難を繞る政治情勢……………三七

第六節 政府當局の對策……………三九

第七節 英本國の態度……………四六

第八節 第三國の態度……………五〇

第九節 今次飢饉の特性と批判……………五二

第十節 大東亞戰爭との關係……………五六

第一節 食糧難の實情

印度に於ける現在の食糧難は大東亞戰爭勃發直後の昨年春頃より俄かに傳へられ始めたものである。即ち昨年三月十日印度政廳農相が議會に於いて小麥不足の對策につき説明したことが報ぜられて居り、四月には諸州及び土侯代表者の會議が政廳主催の下に開かれ、食料品並びに飼料の増産對策が討議せられたと言はれてゐる。六月にはカルカッタに於いて米の供給が斷絶に瀕したと傳へられ、十一月に至つては遂にボンベイ、アーメダバッドその他に於いて食糧暴動が起り、ベンゴール州に於いては餓死病人續出、セイロン島に於いても米不足の結果配給が從來の三分の二に減らされたといふ如き情勢に立ち至つてゐる。

本年に入つても形勢は好轉せず、特にボンベイ及びカルカッタの窮狀が喧傳せられたが、ボンベイに於いては小麥の拂底甚しく一月五日印度商工會議所は政府が速かに對策を講ぜざれば暴動勃發の虞ありと政府に警告を發し、又一月中旬にはボンベイの小麥貯藏量は二三週間にして涸渴、重大事態を惹起すべき形勢にありとされた。かくて一月二十日のデイリー・メール紙はこれに就き「多數の印度人は今や飢餓線上にあり、食料品價格は日々暴騰、貧民の日用必需品入手は日々困難となりつゝある。食糧不安は小麥を最とし、米、砂糖、鹽、及び油類に及んで居り、反英運動家の煽動によつて事態は一層惡化の途にある」といふ風に報じてゐた。併し其の後政廳が各種の應急策を講じた結果一月下旬頃より食糧難はやゝ緩和された模様で、二月十

八日のタイムズ紙デリー通信によれば、「食糧問題は其の後生産、配給の両面に於いて格段の改善を見つゝある。本年の春作物の收穫豫想は消費に對し五分の不足といふことであつたが、最近の見積りでは不足額は二十萬トンを減少して居り、若し小麦の作柄が現状を維持すれば、天候の如何とか虫害とかの憂はあるけれども、右五分の不足は消失するであらう。加ふるに濠洲よりの小麦輸入も相當ある筈で、(註、三月中旬迄に濠洲より十萬トンを輸入したと云はれる。價格も下落しつゝある)とのことであつた。然しながら、それも東の間で、四月末頃より食糧問題はアツサム、ベンゴール、オリツサ、ビハール、マドラス、ボンベイ各州を中心に再燃し、アツサム州市民代表は五月九日州政廳に押しかけて當局に緊急措置をとるよう要請、ベンゴール、マドラス兩州の首相もデリーに赴いて中央政廳と折衝するに至つた。

六月の端境期に直面して食糧問題は更に重大化し、食糧不安は前記諸州に止まらず西北邊境州にも波及したと傳へられたが、就中ベンゴール州のそれは深刻を極めて來た様子で、從來政廳支持色の濃かつたカルカッタの英人經營新聞ステーツマン紙の如きも州内の慘狀を偽らず報道し、七月二十日のタイムズ紙も「ベンゴール州に於ける食糧問題——全般的食糧難」といふ題下に詳細な報道を掲載した。かやうな事態に對し、七月五日より食糧省主催の全印食糧會議がニュー・デリーに開かれたのを始め、八月の印度中央立法會議も殆ど食糧問題の討議に捧げられた模様である。

八月六日印度政廳商務長官は議會に於いて一九四三年度英領印度の穀物不足量を百五十萬トンとし、土侯國の供出を見込むも尙百萬トンの不足ある旨言明し、現在の各州別食糧穀物需給狀態を左の如く説明した。

不足地域	不足量(千トン)
ベンゴール	二、〇〇〇
ボンベイ	九四二
マドラス	一、二五〇
アツサム	一一〇
オリツサ	一〇三
其他諸州	三二八
合計	四、七四三
過剩地域	過剩量(千トン)
パンジヤブ	一、六八五
シンド	六四九
中央州	三九三
ビハール	六六
其他諸州	四三三
合計	三、二二六
差引不足量	一、五一七

若し右の數字が正確であるならば、その不足量は僅かに百五十萬トンで、政府の施策宜しきを得れば必ずしも重大な惨狀を惹起することなくして事態の收拾が可能であるべき筈である。しかし、實際は國外への流出、軍の徴發等による不足量は遙かに大で、過剰量は反對にすつと少いものと想像される。加ふるに退藏の結果として配分の圓滑を缺き、更に戦時輸送難のため過剰地域から不足地域への移動も満足に行はれず、否、過剰の州に於いてさへ地方によつては食糧不足に悩んでゐるといふのが現實の狀態のやうである。

八月末に至つてベンゴール州の飢饉狀況は「全く言語に絶するものあり」と傳へられたが、試みに九月以降の同州に於ける慘狀を所報順に要約記述すれば左の通りである。

九月五日 カルカッタ市内に於ける一週間の死亡者數は過去五ヶ年間平均五百八十八名であつたが、最近

一週間の死亡者は一千二百二十九名に激増してゐる。(ニューズ・クロニクル)

九月二十日 食糧難のため州内には幼児の賣買が行はれ(ロイター)、カルカッタ鐵道では食料品の盜難事件續出し過去三十日間に一日平均千七百件に達してゐる。(ガゼット)

九月二十四日 カルカッタ市内の死亡率は最近コレラ及びチフスの發生によつて更に増大し、過去一週間の死者は千二百九十二名であつた。(AP)

九月二十六日 カルカッタ大學の人類學部が市内の難民五百四家族について調査したところ、内二十五パーセントまでは食糧難のため家庭分散の慘狀を呈してゐる。(同盟)

十月四日 八月一日より九月末までにカルカッタ警察當局に報告された餓死者は三千二百六十四名であつ

た。(UP)

十月五日 四十人足らずの收容力しかない病院に八十人乃至九十人が押し込められてゐるのは極めて普通で、看護婦に至つては五萬三千人の患者に一人の割合しかゐらないといふ實情である。(デイリー・ヘラルド)

十月十五日 九月十九日以降の一週間に於けるカルカッタ市内の餓死者は千四百九十二名、九月二十六日以降の一週間に千六百三十七名に達してゐる。(ステーツマン)

右はベンゴール州のみの實情であるが、その他の諸州に就いても「オリッサ地方の慘狀は想像以上で、大多数の家庭では女、子供達は二日も三日も何も食はず、蠅のやうに死んでゆく」(九月二十一日、デイリー・ワーカー)とか、「印度南部のマラパール地方では過去三ヶ月間に三萬人のチフス患者を出したが、死亡率は八パーセントであつた、またコレラも一地方を除きマドラス州の各地に蔓延するに至つた」(九月二十四日同盟)といふ風に報道されて居り、また英國印度事務相アメリーは九月二十三日の下院に於ける答辯の中で「飢饉の被害が一番甚大なのはボンベイ州、マドラス州の一部、コチン並にトラヴァンコール地域のやうな従來海上輸送に依存してゐた地方及びベンゴール州である」と述べた。

右の慘狀は更に十月に入つても悪化の一途を辿り、十月三日以降の一週間に於けるカルカッタ市内の餓死者千九百六十七名、十日以降の一週間に於いて二千五百五十四名に達した。而して九月十九日より十月十六日に至る四週間に於ける同市内の餓死者實に六千二百四十九名を算へてゐる。その後の二週間に於ける狀況

は報せられてゐないが、十月三十一日より十一月六日までの一週間には千百五十二名の難民が病院に收容され、うち五百二十三名は死亡してゐる。

六

(追補) 十二月十六日印度事務相アメリーは英國下院に於いて左の發表を行つた。

ベンゴール州全體での餓死者の數は不明であるが、一九四三年八月十六日より十二月十一日までの期間内にカルカッタ市で

一、飢餓に悩み病院に擔ぎ込まれた者の數は一萬六千二百八十五人

一、病院での餓死者は六千三十六人

である。更に八月一日より十二月十一日までの間にカルカッタ市の警察其他救濟團體が處分した死體の數は九千二百十六個である。又六月廿七日から十一月十三日までにベンゴール州全體でコレラに依る死者は七萬七千九百三十八名である。

なほ食糧不足の實情は物價の騰貴狀況特に食料品價格の騰貴狀況によつても知ることが出来る。印度政廳發表によるカルカッタの卸賣綜合物價指數は、一九一四年七月の一〇〇に對し、今次歐洲戰爭勃發直前の一九三九年八月に於いてもやはり一〇〇であつたが、大東亞戰爭勃發直後の一九四二年一月に於ける指數は一五五で、この間の騰貴率は一ヶ月平均二・五ポイントである。然るに同年十二月の指數は一躍二三八となり月平均七・五ポイント強の騰勢を示してゐる。しかも此の指數は日本軍がビルマを完全に占領した昨年四月

より急激に上昇して來たもので、即ち、四月の一五七に對し、五月には一六九、六月には一八一、八月には一九二、九月には二〇六、而して十二月には二三八となつてゐるのである。

また個々の物價騰貴狀況を食料品のみについて見れば左表の通りである。(一九一四年七月基準)

	一九三九年八月	一九四一年一月	一九四二年二月	一九四二年十二月
穀物	一〇〇	一〇一	一一四	一五〇
米	一一二七			二四一
黍類	九三		一一二	
豆類	一三八		一六四	二三一
砂糖	一九七		二四八	二九三
茶	一四六		二二七	四一一
その他の食料品				

(「國際經濟週報」及び「同盟世界週報」に依る)

右はカルカッタ市場に於ける卸賣價格指數であり、全國的に見る時は勿論相當の凹凸があることを知らねばならない。なほ右表に於いては穀物一般及び米の價格騰貴がそれ程著しくないが、これは卸賣價格の指數であり、政府の統制が此所までは相當及んでゐるものと思はれる。従つて小賣價格は右よりも遙かに上廻り

七

殊に闇取引に於ける価格は甚だしいものがあり、本年一月のジュネーヴ発行雑誌ニューステイツマン・アン
 ド・ネーションは印度に於ける米の闇値段が戦前の十二倍になつてゐると報じたが、印度事務相アメリーも
 四月十五日下院に於いて「米價が戦前の價格の六倍に昂騰してゐる」ことを認め、更に六月の下院に於いて
 は八倍に昂騰してゐることを認めてゐる。尙他の情報によれば米價は戦前一マウンド（約三七キロ）五ルビ
 ーであつたのが現在では公定二十ルビーとなり、更に闇値段では八十ルビーに達し、しかもなほ入手出来ぬ
 状態だと云はれる。

物價の騰貴に従ひ生計費が昂騰してゐることは勿論で、大東亞戦争以後の状況については適當な資料がな
 いが、本年二月の同盟ベルリン電によれば、印度労働者階級の生計費は歐洲戦争勃發以來三ヶ年間に平均約
 六〇パーセント騰貴して居り、その中食糧費は一〇〇パーセント、燃料費は六四パーセント、衣服費は六〇
 パーセントの騰貴であるとのことである。

第二節 印度食用農産の實勢

印度の飢饉を考察するについては一應印度食用農産の平時状態を一瞥する必要がある。

印度は本来農業國で總人口の中農村居住者はその八九%を占め、農業に依存して生活するものは總人口の
 約七割に達する。しかもその廣大な領域の約三分の二は耕作に適し、天恵豊かな氣候風土は殆んど凡ゆる農

作物の生産を可能ならしめ、飢饉の如きは到底あり得べからざるやに感ぜられる。

農作物の作付面積は印度人の菜食主義よりして食用作物が壓倒的で、總面積の八〇%以上を占め全國的に
 耕作せられてゐる。食用作物中穀作はその首位を占め七六%に及び、穀作中米は斷然優位にして小麦、粟、
 豆類、稷、大麦、玉蜀黍之に次いでゐる。

作付面積表 (英領印度)

	一九三七—三八年	一九二八—二九年
米	六九、四五五(千ヘクター)	八一、一三二(千ヘクター)
小麦	二六、六三二	二四、九二六
小	二〇、七〇二	二〇、五三四
豆類	一三、六六二	一三、六二五
バジラ	一二、四九八	一二、九五二
大麦	六、三一	七、五三三
玉蜀黍	五、六三三	六、〇一二
ラギ	三、四七五	三、九〇四
其他穀類	二八、三九三	二九、六五一

小計 食用穀類	一八六、七六二	二〇〇、二六九
甘 蔗	三、八五九	二、六七五
其他食用作物	六、七〇一	七、八五二
合 計	一九七、三二二	二一〇、七九六

右の表中米の作付面積が近年に至り著しく減少してゐるのはビルマの分離による結果である。そして過去十年間に於いて穀類の作付面積は必ずしも増大を見てゐない。その原因は一は農村人口過剰の爲に瘦土までその耕作の限界を擴大し且つ土壤そのものが既に疲弊消耗の極に達したことで、他は英國資本主義の導入により輸出農産物乃至は工業原料たる棉、黄麻、油料作物等の非食用作物が増加の傾向を呈したことにある。右の如く印度の農業特に食用作物については作付面積は殆んど變化のないのみならず、農事の改良亦殆んど実績の見るべきものがない關係から、年々の收穫は時によつて多少の増減ありとするも殆んど大差なく、その増減は全く天候殊に降雨量の適否に左右される。モンスーンの襲來が遅れるとか或は弱い時は收穫不良にして飢饉の招來をも見るに至ることがある。これ印度食用農業の一大特色である。

【参 考】

英領印度に於ける作付面積増減狀況

一九二一—二二年	總作付面積	内食用穀類作付面積	割 合
	二二三、百萬エーカー	二〇五	九二

一九三〇—三一年	二二九	二〇三	八九
一九三七—三八年	二一三	一八七	八八

次に食用作物の生産狀況は左の如くである。

米	一九二八—二九年	一九三七—三八年
小 麥	八、五九二	一〇、七九四
大 麥	(マドラス州は不明に付除く)	二、〇八五
ジ ョ ワ ール		四、〇三九
バ ジ ラ		一、九〇四
小 計		四五、五五九
玉 蜀 黍		二、〇〇九
豆 類		三、二三八

更に之を各作物別に就いてその生産と需給狀況を見よう。

(一) 米

米は一九三七—三八年度生産額二千六百七十三萬七千トンで世界第二位を占める。ビルマの米作面積は分

離前の全印度米作面積の一五%に過ぎなかつたが、印度の米穀輸出はビルマに於いて事實上獨占し又印度諸州の地方的需要に應じてゐた。現在印度の米の主要生産地はベンゴール、マドラス、ビハール、オリッサ及聯合州等で是等五州だけで全産額の八割を占める。是等の地域はガンヂス及ブラマプトラ河に潤され且高濕にして雨量が多い。ベンゴール・デルタ及びマドラス平野はその中心をなしその産米量は全印度の六〇%に達する。但しモンスーンの影響を受けること最も甚だしい。

各州別米生産高 (一九三七—三八年)

ベンゴール	九、〇三四(千トン)
マドラス	四、八五〇
ビハール	三、一四四
聯合州	二、〇一七
アッサム	一、七四五
オリッサ	一、六二二
中央及ベラール	一、五五二
ボンベイ	八六〇
シンド	五一九

クールグ

五五

計

二五、三九九

(註、アジメール・メルワラ、デリー、西北國境州、パンジャブは不明に付除く)

(二) 小 麥

小麦は米に次いで廣く栽培せられ一九三七—三八年の生産額一千七十九萬四千トンで世界第四位である。主要産地はパンジャブ及聯合州でこの二州だけで全收穫高の四分の三を占める。小麦生産地はモンスーンの影響が少い。輸出は國內外産額の増減如何により常に變動してゐたが、近年國內需要増大の爲輸出は漸減し一九三八年度は僅かに二十八萬トンを輸出したに過ぎない。

各州小麦生産高

(一九三七—三八年)

パンジャブ	三、七二四(千トン)
聯合州	二、七七七
中央及ベラル	六七三
ビハール	四三三

シン	三八六
ン	
ド	
ボン	三〇七
ベイ	
西北國境州	二六八
ペン	四五
ゴール	
德里	二〇
リ	
アジメール・メルワラ	七
オリ	一
ッサ	
計	八、六四七 (但、マドラスは不明に付除く)

(三) 大 麥

大麥は小麥と殆んど同地帯即ち聯合州、ビハール及パンジャブ州に栽培せられる。從來輸出穀物として英國に送られてゐたが今日では殆んど全部國內消費に充當される。産額大體二百萬トンから二百三十萬トン程度である。

(四) 稷 類

稷は半島南部、中央部又は山岳地方の乾燥地帯に於ける農民の主要食糧で同時に牛の飼料として使用され

(五) 豆 類

豆類も亦印度住民の主要食糧の一であり全國に栽培されるが、就中聯合州(過半を占む)パンジャブ、ボンベイ、中央州、ベンゴール州に多い。

(六) 玉 蜀 黍

玉蜀黍も稷と共に貧民階級の食糧とし併せて家畜類の糧秣として用ひられる。年産平均約二百五十萬トンで聯合州、パンジャブ、北西國境州、ボンベイ、ビハール、オリッサ等はその適地である。

次に灌漑状態を見るに印度農民は古來、或は貯水或は井戸の掘鑿或は河川の整調によつて灌漑工事を施したが、英國支配下に於いては印度灌漑委員會が設置され運河の改修等が行はれた。然し本がら廣大な面積に對して充分に之を期待することが困難で一九三七—三八年農耕地作付反別二億一千三百五十一萬四千方エーカーに對し灌漑總反別五千二百八十八萬三千エーカーにしてその割合二四%に過ぎない。之を地方別に見ればシンド(八七%)、パンジャブ(五九%)、北西國境州(四八%)、アジメール・メルワラ(三六%)、聯合州(三二%)、デリー(二八%)、マドラス(二七%)、ビハール(二二%)、オリッサ(二二%)は稍々進歩の跡を見るもベンゴール、中央州、ボンベイ、クールグ等の諸州即ち英國人に關係薄い米の産地では灌漑は極めて不完全である。

印度の農民労働者は大體收穫期間備主より幾分の穀物を支給されるが、一年中一部分の期間だけしか備はれない。一年の約半分は全然収入がないので繁忙期の稼ぎで食つて行かねばならぬ。従つて印度農民は實際上一日一回食を通例とする。

家に居る産業労働者成人男子とボンベイ監獄囚人との一日食糧消費量比較表

品目	産業労働者(單位ポンド)		囚人	
	ボンベイ	マドラス	輕労働	重労働
穀物	一・二二九	一・一三三	一・三三八	一・五〇〇
豆類	〇・〇九	〇・〇七	〇・二二一	〇・二七〇
肉類	〇・〇三	—	〇・〇四	〇・〇四
鹽	〇・〇四	〇・〇五	〇・〇三	〇・〇三
油類	〇・〇二	〇・〇三	〇・〇三	〇・〇三
副食物	〇・〇七	〇・〇九	—	—
計	一・五五四	一・三三七	一・六九	一・八七

右の表はボンベイ、マドラスに於ける産業労働者の食糧消費状態が囚人のそれに比し尙且著しく低位にあ

ることを證明せるものであるが、右は工場労働者を標準とするもので、貧困の極度にあつてしかも人口の大半を占める農業労働者の状態を律する譯には行かない。印度は極端な貧富の懸隔を有する國柄であるがために食糧消費量の一人宛平均を算定することは到底不可能で、従つて國內に於ける食糧の需給状態を數字を以て的確に指示することはむづかしい。前記八月六日の商務長官の説明では一九四二年度の穀物供給量四千二百四十萬トンに對し、消費大人一人當り一封度の割で全人口の需要量三千八百五十萬トンとなり、差引約四百萬トンの剩餘がある筈との事である。消費大人一人當り一封度と云ふのは後に説明するボンベイ等に於ける戦時割當量を基礎としたものと考へられるが、全人口の需要量三千八百五十萬トンといへば全人口を三億八千五百萬と見て一年一人當り十分の一トン即ち二百二十四封度で一日一人當り平均〇・六封度強となる。従つて右は老人子供等を考慮に入れての算出と思はれるが、本来右の割當量は都市にのみ適用され農村には及ばない筈であるから、之を基礎とした推定需要量が果して現實に適應してゐるかどうか甚だ疑問である。尤も前掲産業労働者對囚人食糧消費量比較表所載數量と對比するときは大人一日一封度の割合を以て全人口の需要量算出の基礎とするには必ずしも過少ではないであらう。尤も九月二十八日のマンチェスター・ガーディアン紙の社説は印度政府の責任あるスポークスマンの説明によると印度食糧平均生産量五千萬トン、消費量五千五百萬トンだとのことで、之によれば平時でも輸入に俟たなければ充たし得ない實状であると述べてゐる。この數字には豆類及玉蜀黍の類も包含されてゐるやに認められるが、(前掲一九三七—三八年産生産表参照)不足高は五百萬トンに上り、商務長官の説明とは大差がある。他方平時に於ける穀物の輸出入を

見るに大體ビルマの米を百五十萬トン内外輸入し、小麦を三十萬トナ内外輸出してゐた筈であるから、之を差引すると百二十萬トン前後の不足となる計算である。然しながら印度人の常食物は米、小麦等のほか穀もあれば豆類も玉蜀黍もある。合計五十萬トン以上に上る食糧需要に對し百二十萬トン内外の不足は本來問題とするに足らないもので、絶對量の上から觀察すればビルマの喪失如何に拘らず印度は自給自足せんとすればなし得る國柄と云つて差支はない。

第三節 今次食糧難の原因

印度各地に於ける昨年來の食糧不足の重要原因は之を端的に云へば英國の功利政策と戦争とである。更に之を敷衍せば第一には印度をして北阿及東亞に對する兵站基地たらしめた軍需第一主義に基く搾取であり、第二には英國が印度大衆の犠牲に於いて戦争遂行の目的を達成せんとする放漫政策の結果たる悪性インフレーションに伴ふ買溜め賣惜みであり、第三には印度戦時經濟の混亂と潜行的反英運動に伴ふ全國的不安であり、第四には大東亞戦争によるビルマの喪失である。尙これ等の主要原因に加ふるに印度人口の偏在的増加、氣候不順による不作等を擧げることが出来る。今説明の便宜上此等諸因を戦争と直接關係のない一般的东西のものと、戦争と結びついた特殊の原因とに分類して一々検討を加へるであらう。

(一) 一般的原因

(イ) 貧困 印度人口の七割を占める農民が恐るべき貧困状態にあることは著名の事實で、これが飢饉の絶えざる基礎的原因をなしてゐる。貧困の原因としては、零細耕地による小農經營、而もその散在性、幼稚な農耕法による僅少な生産、農家副業の缺如、地力の衰退、農業人口過剩、低賃銀、負債及小作料支拂の不斷の強制等に加ふるに英國多年の搾取政策と資本主義導入による農村自給制の崩壊がある。

印度農民は移住民族の一處への定住に始まり村落共同體の下に廣汎な自治と自給自足的經濟を行つてゐた。即ち耕地は農民各々の家族の勞働とその農具や家畜によつて耕作せられ各家族は耕地に對し世襲的な使用權をもつてゐた。その後社會の發展に伴つて土王又は土侯の下に統率された村落となり農民は彼の保護の下に農業を營み貢物を奉る義務を持つてゐた。英國東印度會社が印度に侵入するや、ベンゴールの太守より一定地域の歳入徵收權を獲得すると共に、土地制度を私有財産制とし次第に農民をモガール王朝より切り離し、新支配者たる東印度會社に直接結ばしめる政策を採用した。英國の直轄統治以後に於いても當時の制度が維持せられ舊藩侯の封建的權力の繼承者たる擬制の下に舊慣尊重の美名に隠れて封建的利益を搾取することによつて農民の生活向上が抑壓された。小作料は通常生産額の折半であるが、小作人は種々なる社會的又は宗教的の物納給付義務を負ふ結果として、生産高の四分の一を入手するに過ぎなかつた。印度の農耕地は英國資本主義の導入によつて更に細分された。元來印度は宗教上の慣

習によつて不動産は遺子に均分されるが、更に資本主義に伴ふ交通及商業の發達、租税の金納等による農村に於ける貨幣使用の強要によつて土地は賣買可能の商品と化し、土地の共同體的經營は崩壊して個人主義的經營となつた。かくて細分化された土地は全印度耕地面積二億餘エーカーにつき農民一人當り經營面積僅かに〇、八九エーカー、一家族五人平均として四、四五エーカーに過ぎない。耕地の七分の五は大地主の所有であり、自作農は僅かに四分の一で、小作零細農の如何に多いかは一見明らかである。印度第一の豊穰地方と言はるゝパンジャブ州二千四百の農村に於いて一人當りの所有地割合左表の通りである。

一エーカー以下	一八%
一—三エーカー	二五%
三—五エーカー	一五%
五—一〇エーカー	一八%
一〇エーカー以上	二四%

これは比較的良好なパンジャブ州の状態であり、ベンゴール、ビハール諸州に於ける農民の一人當り所有地はその三分の一に止まつてゐる。しかもこのパンジャブ州に於いてさへ一エーカー當りの耕作資金は三十ルピー見當と言はれ、戦前の英國に於ける一エーカー當り耕作資金十五ポンド(約四百ルピー)

に比すれば格段の差がある譯である。更にその收穫量を見るに一九三八—三九年度に於いて米穀は一エーカー當り、アメリカの一千四百七十一ポンド、エチオプトの二千七十九ポンド、イタリアの三千ポンドに對し印度では七百三十一ポンドに過ぎず、小麦は一エーカー當り獨逸の二二・六キントル、英國の二〇・六キントルに對し印度は僅か七キントルといふ有様である。しかも農耕の改良は殆んど顧みられざる上英國官憲の農事奨励は主として棉花、ジュート、茶、油種子等の輸出作物に向けられたがため食用農業に多く依存してゐた農民の貧困は愈々加重し、大多數の者は常に慢性的飢饉状態にあつたのである。農業労働者の賃銀は印度の大部分に亘つて一日一アンナ(邦貨七錢五厘)乃至三アンナ、女子は一アンナ乃至二アンナに過ぎない。かくて人身賣買は盛んに行はれる實情である。一九三一年の統計では男子千七百十一萬人女子千四百三十七萬人合計三千四百四十八萬人が賣買の對象となつてゐる。之を要するに印度農民の貧困は英國多年の重商主義的搾取に基因する所頗る顯著で、物質文明の注入と共に激成された貧困は言ふまでもなく飢饉の根本的原因であるが、同時に些少の異變によつて直に飢饉を誘導する一般的状態とも云ふべきである。

(口) 人口の増大 從來英國方面には印度の飢饉を人口に對する自然的調節であると論じ、その救済に巨費を投ずることを無用視する者もあつた位で、人口増加に對し食糧増産の伴はないことは前節に於いて既に指摘した所である。印度に於ける人口増加状況は左の通りである。

一九一一年	三〇二、九九五、〇一四
一九二二年	三〇五、六七三、七八八
一九三一年	三三八、一一九、一五四
一九四一年	三八八、九九七、九五五

なほこれに就いてその増加率を見ると左の如くなつてゐる。

一九一一年—二二年	〇・九%
一九二一年—三一年	一〇・六%
一九三一年—四一年	一五・〇%

註。以上の數字は何れも一九三六年分離されたビルマのそれを除外せるものである。

英國印度事務大臣は永續的なる食糧難の原因として鑛山區域並にチャムシドプール、ビハール、インドーア、マイソール、バンガローに於いて特に人口稠密なる事實を挙げ事態最悪の地方としてベンゴール、ボンベイ、マドラス、コーチン、トラバンコールを指摘した。殊に最近の軍需工業等の勃興によつて人口の偏在が急激に助成されたこと、推測される。右は戦争によつて誘導されたものの一であるが、便宜上茲に一言する。

(ハ) 氣候不順による不作

昨年以來印度は局部的にはあるが、少くとも四回の天災に見舞はれてゐる。即ち、昨年十一月中旬東岸のカタック、プリ、ガンジヤム地方に豪雨を伴ふ大旋風發生、死者三百七十名、流失せる家屋竝に畜類多數に及んだのを始め、本年に入つては五月下旬にマドラス州アルコット地方に大洪水あり、住宅倒壊六千戸に及び、死者は十一名であつたが、同地方の米作は完全に失はれたと言はれる。又、六月上旬にはオリッサ州に颱風襲來ガンジヤム地方だけでも死者四百三十六名を出し、倒壊家屋は三萬五千戸に達した。而して八月上旬にはラジプタナ州アジメール・メルワラ地區の大洪水で死者六千名、家屋家畜の流失多數に及び、農作物に甚大な被害があつた。これらの地方は何れも米或は小麦の産地であるから、災害の結果が少くとも地方的な食糧不足の原因となつたことは確かである。

右の外天災とまでは言へない氣候不順に基く不作は相當廣範圍に亘つてゐる。即ち、昨年六月三十日のファイナンシャル・タイムズ紙は同年及び前年に於ける作柄が平年作以下で、特に米と小麦の不作甚しく米は二百九十萬トン、小麦は四十萬トンの不足を來すであらうと傳へたが、更に本年一月二十六日のタイムズ紙は前年度に於いてボンベイ州の三分の二並に中央州の一部に亘り旱魃のため稷が非常な不作であつたと報じた。右につき商務長官サルカルの説明によればボンベイ州に於いては旱魃のため稷收穫は平年の三分の一(約百十七萬トンの不足に當る)に減じたことを直接誘因として小麦の不足は重大化したとのことである。

右は前年度の不作が本年に持ち越されての食糧不安であるが、その後八月十日の同盟イスタンブール電によれば、印度に於ける本年第一期作は米、雜穀ともに概して不良で四分乃至五分の減收を示してゐることである。これは假りに減收率を四分と見て米約百萬トン、雜穀約三十五萬トンの減收を意味する。尤も小麥は本年は相當の豊作で、昨年比し十パーセント増收と傳へられるから雜穀の減收はある程度補はれることと想像される。果して然らば氣候不順による食糧の不足は主としてベンゴールの米の不作にありと認められる。そして前記商務長官の一九四二年度收穫高の説明は現在に於いて唯一の信憑すべき材料であるが、それによれば穀類總量四千二百四十萬トンで一九三七—三八年の穀物收穫四千五百五十六萬トンに比し約三百二十萬トンの減産となる勘定である。

(二) 特殊的原因

(イ) 農村の勞力不足による生産減退 歐洲戰爭勃發以來印度人の軍隊に徵募される者は夥しい數に上り大東亞戰爭以後は更に激増してゐる。去る十月六日の英國政府發表によれば現在の印度軍兵力は二百萬に達してゐる由であり(この點については(ニ)参照)又、印度が英國の一兵站基地とされて軍需工業が飛躍的に増加擴大されるに至り、それら工場への徵用も莫大な數に上つてゐることと察せられる。後者に就いてはその數字を知るべき資料がないが、兎に角これら軍隊及び軍需工業方面へ印度農民が夥しく徵用された結果、農村勞働者が不足したといふことも、食用農産減退の一原因として當然擧げられな

ければならぬ。

(ロ) 輸入の杜絶 前記の通り印度は年産二千六百萬トンに上る米を産出してゐるも、國內消費を充足するに足らず、戦前に於いて年々百四五十萬トンを國外より輸入してゐた。而して米の供給先は九割以上がビルマであり、他は佛領印度、泰國等であつた年百四五十萬トンと云へば印度の需要する全食糧の僅か三割に過ぎないが、印度全國の配給關係は戰爭と共に益々困難化し、殊に印度各州に存する政治的及經濟的の割據事情及戦時下の輸送状態が各州相互間の有無疎通を阻害してゐる結果として、從來地方的要求に應じてゐたビルマ米の輸入杜絶の食糧不足に及ぼしてゐる影響も決して僅少であり得ない。今次飢饉がベンゴールに於いて特に甚だしいのは一面その間の事情を物語つてゐる。英國印度相アメリカもビルマ奪還までは食糧問題の解決は不能であることを認めた事實がある。

(ハ) 輸出の續行 前述の如く印度は米を輸入に俟ち、小麥、大麥何れも需要増大によつて最早輸出の餘力を失ひ、而も最近生産減退の状態にあるにも拘らず、歐洲戰爭勃發以來反艦軸軍一方の兵站基地として、西亞、アフリカ方面へ従前以上の輸出を續け、北阿戰線への食糧補給を一手に引受け又イランの飢饉も印度小麥の輸出によつて救はれたと言はれてゐる。かくて印度商業界に於いては印度政廳が切實なる民需を無視して食糧を買上げユナイテッド・キングダム・ヨーロッパ・コーポレーションの如き英人の獨占商社をして、中亞、西亞、英本國等へ多量を輸出せしめた事が食糧不足の眞の原因であるとして政府を激しく非難してゐる事實がある。これら食糧の輸出量に關する正確な數字は不明であるが、一九四二年末に

印度政廳商務長官が議會で發表した所に依れば、一九三九年九月より四二年六月までに米八十二萬七千トン、小麦四十三萬トンその他穀物及び豆類二十七萬八千トン、合計百五十三萬五千トンを輸出したとのことである。この數字によれば年平均五十四萬二千トンである。それは果して眞實であるや否やは之を立證することが出来ない。しかし民間の輿論よりすれば更に大量の輸出されたことが想像され、しかも不足勝なる米の輸出まで行つてゐることは注目に價する。

右に關連しボンベイ・クロニクル紙は、商務長官サルカルが、食糧は十分なり唯配分が不充分だと言つたこと、又運輸長官ベントホールが、輸送力に不足ない分配の不適正及買溜が主因であるとしたことを反駁し、政府が海外輸出及軍需に關する正確詳細の數字を擧げざることを指摘すると同時に、印度人商業會議所が凡ての食糧輸出禁止を勸告したことを支持する論説を掲載した。

(三) 軍隊への補給 平時に於ける印度の常備兵力は英國軍五萬七千、印度軍十五萬九千、他に空軍約三千と海軍二千があり、合計二十二萬一千(一九三八年度の調査による)であつたが、一九三九年九月より急速に軍備の擴充が行はれて居り、四十年四月までに五萬三千、同年十二月までに更に十萬といふ風に増員されて、四一年三月には印度内兵力だけで五十萬に達し別に二十萬の海外派遣を行つてゐた。そして其の後は更に急激な増加を示し現在二百萬と云つてゐる。他の情報によれば印度軍現在の實數は大體印度兵七十萬、英國兵五萬、北阿土民兵五萬、重慶兵十萬その他を合して約百萬と云ふのが眞相に近いのであるまいかとのことである。尤も約百萬と云ふのは戦闘員だけを指してのことと思はれ、從

つて非戦闘員の徵發を加ふれば或は二百萬と云ふのは誇大でないかも知れない。(前大戰では英領印度は戦闘員六十八萬、非戦闘員四十一萬を供給した。それは兎も角軍隊へ補給する食糧が莫大な量であることは言ふまでもない。去る八月末政廳は民衆の非難に對し、在印各軍の一ヶ年需要總量は小麦五十萬トン、米十四萬四千トンに過ぎないと公表したが、八月中旬の印度中央議會に於いて一議員が政府はベングール州のみに於いてさへ一月より三月までに三十萬トンの米を軍用に買上げた旨を指摘した由である。また昨年六月三十日のファイナンシャル・タイムズ紙は同年に於ける印度國防軍の需要食糧中米のみでも六十三萬トンに達した趣を報じてゐる。前記政府の公表中米の十四萬四千トンは何れの點から見ても餘りに過少である。英國側の公表する二百萬の印度兵數を標準としその一日一人當り穀物需要量を印度重労働囚人の消費量一封度半(前節参照)で算出して見ても一年五十萬トンに達する。軍隊に對して囚人並の待遇をしてゐるものとは考へられぬ。況んや軍當局では飢饉を利用し兵士には潤澤な食糧が給與される故を以つて無關心な印度人徵募の好餌たらしめてゐるとか、ビルマ奪還作戦遂行のため印緬國境に多量の食糧を貯藏してゐるとかの情報もある。

(ホ) 輸送難 戦争勃發のため鐵道、船舶その他の運輸機關が軍事目的に對し優先的に使用されるやうになり、一般民衆のための食糧輸送が圓滑を缺くに至つたことも亦食糧難の有力な原因である。印度政廳の戦時輸送關係官エドワード・ベントホールは昨年十二月四日夜の國內放送に於いて、軍隊及び軍需資材輸送の爲の鐵道利用度が飛躍的に増大した外に、從來海上より輸送されてゐた石炭が鐵道による外

なくなり、亦カルカッタに陸揚げされてゐた各種貨物も今はボンベイに陸揚げして後鐵道によつて運ぶ實情であることを告白してゐる。一般的な船腹不足に加へて日本の飛行機及び潜水艦の活躍により海上交通が著しく制限せられるに至つたことも勿論である。而して、鐵道輸送がコングレスの運動に刺戟された頻繁なるサボタージュや洪水によつて兎角妨げられ勝ちであることも事實のやうである。本年二月十二日政廳内相マクスウェルが発表した所によると、昨年八月より十二月までに反英暴動によつて破壊された停車場は三百十八、鐵道線路の破壊件数は百三、鐵道材料に對する重大損害件数は二百五十四であるといふ。自動車も勿論大部分が軍事目的に徵用されて居り、更にベントホールは前記放送に於いて民有の舟艇及び牛車類の徵用をも暗示してゐる。

(ハ) 退蔵(賣惜みと買溜め) 九月二十三日印度事務大臣は下院に於いて印度食糧飢饉に關し一つの聲明を行つたが、その中に食糧飢饉の原因としてその直接的なものにつきベンゴールに於ける米の不作、ビルマ米の輸入杜絶等あるも、最も重要な理由は農民の賣惜み、商人の買溜め、全國的不安、地方行政機關の對策失敗等にありとし、その責任を印度人側に轉嫁せんとした。

食糧不足の聲が傳はると共に、値上りを見越した食糧關係者の投機的な賣惜みや買溜めが跋扈して食糧難をいやが上にも助長した。曩に第二節でも述べて置いた印度商務長官の説明では、穀物總供給量四千二百三十九萬トンに對して推定需要量三千八百五十萬トンと睨み合せ凡そ四百萬トンの過剰がある筈なのに、なほ百萬トン以上の不足がある。従つて五百萬トンの穀物は退蔵と消費増加によつて姿を消

したものとなつてゐる。その説明中消費増加は大部分軍需のものに相違ない。退蔵だけの數字が明確にされないが、現下の非常時に於ける退蔵は食糧不足の重要な原因であることは争はれない。しかもそれは投機心に富む印度人の責に歸するのは利己的でその依つて來るべき悪性インフレの責任は當然英國側にあるものと云ふべきである。退蔵が悪性インフレに因るものと國內不安に基くものとの競合であることは注意すべきである。そのうちのインフレの現況に關しては十月十九日ストックホルム發同盟特派員の電報による最近のエコノミスト誌所報のものが簡潔にして要を得てゐる。即ち左の通りである――

印度では通貨の大膨脹と物價の急騰が起つてゐるが、これは勿論印度が物資及びサーヴィス引渡し
の形で行つた戦費の激増により齎されたものである。その他、印度では割當制、増税及び物價統制な
どの實施が不可能であるといふ事情も、物價の騰勢を促進せしめた要因として無視出來ない。印度の
戦費が如何に巨額に達してゐるかは單に印度政廳の豫算からだけでは推量出來ない。蓋し印度に於い
て英國政府は開戦以來印度政廳が使用した所より以上を費消してゐるからである。一九三九年九月以
來四三年四月に至る期間に於いて印度は英國大藏省より四億三千八百萬磅の資金償還を受けたが、之
に對し印度政廳自身の國防費は三億二千萬磅に過ぎない。是等の支出はそれが國外に於ける物資貯蔵
に使用されるにせよ、或は印度國內の工業擴充に振向けられるにせよ、勞働力と資材を費消し、購買
力を増加せしめる。かくて増加した購買力は減少した民需物資及びサーヴィスに對して競合し、ここ
に物價昂騰の契機を造り出すのである。若し英國が印度國內で支出した金額の返済に當り現物でこれ

を行つたならば、この點に關する限りインフレの脅威は餘程軽減されたであらうが、實際は紙幣で返済され、印度への物資輸入といふ形ではなされなかつた。これが爲印度政廳は單に對英債務の償却を行ふより他なく、償還額は現在までに三億二千萬磅に及んでゐる。また印度準備銀行の磅資金も戦前の五千八百萬磅から現在では五億五千二百萬磅に激増してゐる。インフレ對策には印度政廳もかなり苦心して居り、金銀塊及び重要商品に關して之を擔保とする貸出を禁止したり、或は定期取引を禁止し、現物取引の受渡期間を短縮するなど極力思惑彈壓に努力してゐる。

【参考の一】 今次戦争勃發以來の印度政廳歳出豫算中に於ける國防費の増加狀況は左の通りである。

年	(單位百萬ルピー)
一九三九—四〇年	五三九
一九四〇—四一年	五九四
一九四一—四二年	八二一
一九四二—四三年	一、三三〇
一九四三—四四年	一、八九七・五
一九四一—四二年	一、〇二四
一九四二—四三年	一、八〇〇

右は豫算面の數字であるが、過去二ケ年についてその實際支出額を見ると

に上つて居り、これより推定すれば一九四三—四四年度の國防費支出は二十億ルピーを超えたものと考へられる。併しながら印度はこれ以外更に豫算面に表れてゐない「英國のための臨時軍事費」を負擔してゐる。この臨時軍事費負擔は一九三九年の英印協定に基いて居り、戦後英國より回收する建前を取つてゐるが、印度財務長官レーゾマンの説明によれば「かゝる名目に於いて印度が一時的に支出した軍事費は一九四一—四二年度二十億ルピー・一九四二—四三年度四十億ルピー以上に上る」といふ。即ち、この臨時支出を合算すれば現實の印度國防費負擔は一九四一—四二年度に於いて三十億ルピー、一九四二—四三年度に於いて五十八億ルピーとなるわけである。(日本産業經濟十一月四日所論)

【参考の二】 本年四月英下院に於いてスタンレー・リードは「戦前印度は英國に對し三億七千六百萬磅(五十億ルピー)の負債を有したが今日では逆に在英資金三億三百万磅四十億ルピーに達してゐる」と述べてゐるがこのことは換言すれば開戦以來印度の對英援助が約九十億ルピーにも上つてゐることを意味してゐる。(同右)

【参考の三】 今次戦争以降の印度銀行券流通高の増嵩狀況は左の通りである。

年	月	日	(單位百萬ルピー)
一九三九	九	二二	一、九一四
一九四〇	九	一三	二、二一三
一九四一	七	一一	二、五八七

一九四二、六、二六	四、四三二
一九四三、一、八	五、八六三
同	四、三〇
同	六、七七〇
同	九、三〇
	七、四九八

(同右)

右の如き急速な通貨の膨脹は當然物價の奔騰を招来せずにはゐない。カルカッタに於ける卸賣綜合物價指數は開戦直前の一九三九年八月末に於ける一〇〇から、一九四二年十二月末には二三八に昂騰してゐる(第一節参照)。インフレーションに關連して面白い現象は從來共に印度に於いて投機的思惑の對象となつてゐた金銀塊の品がそれが食糧危機の一因たる退藏を激成したものである。戦争に伴ふ悪性インフレーションの結果として印度財閥乃至は商人等の有するに至つた過剩購買力の急増が當然金銀塊の思惑に殺到することは多言を要しない。然るに最近印度政廳はボンベイ金銀塊市場に於ける先物取引を禁止した趣である。この結果買手は専ら現金で買付ける外なくなり、先物に於ける投機橫行の抑壓は一應成り建相場の騰勢はある程度に緩和された譯ではあるが、買手は値上りを待つて之を賣放ち利鞘を稼ぐことのみを目的とし、まだ投機的色彩が濃厚であり退藏の傾向を助長してゐる。右につきファイナシヤル・ニューズ紙は左の如き記事を掲げてゐる――

退藏慾を満足せしめるには現在印度に出廻つてゐる金銀塊は不足を告げて居り、これが飢饉の大き

な原因の一つともなつてゐる。即ち金銀塊の外に投資對象がないから印度民衆の増大した購買力は結局食料品に集中される結果となつた。この購買力は金銀塊に對する印度民衆の消化力を激増せしめ、殊に一九三〇年代には極めて多額の金が手離され、この結果一層金の買付が拍車をかけられた。しかし今日金銀塊に對する需要を充分満足せしめる如き政策は過剩購買力の吸収に役立つだらうが同時に金銀相場の高騰を促し、延いて食料品の退藏を盛ならしめる云々。

尙十一月十二日ストックホルム發同盟はロンドン來電エコノミスト誌所報として「印度當局は現在ボンベイ市場にて金塊の賣却を行ひつゝあり」と傳へ左の如く述べてゐる

右金塊は恐らく南阿産金で南阿政府と英本國大藏省との特別な取極めに基いて南阿より英國に供給されたものと見られる。右南阿産金は英國より印度に引渡されたのであるが、これに對し印度政廳は印度準備銀行所有の磅資金の中より支拂を行つて居り、事實こゝ三週間の印度準備銀行週報を見ると磅資金勘定の増勢は著しく鈍つてゐる。かゝる金の受入れにより徐々ではあるが印度の磅資金堆積問題は或る程度の解決を見るのではないかと希望的觀測も行はれてゐる。會て印度のインフレーション特別委員會は「若し農家に對し必要な物資を供給することが出来ないならば政府は須らく彼等に貴金屬を賣却し其の有する過剩穀物の出廻りを促進すべきである」と言つたが、最近の印度政廳の金塊賣却はこの線に沿ふもので穀物の退藏吐き出しに相當役立つのではないかと期待する向もある。ボンベイ市場では連日大量の取引が行はれてゐるが、これは殆どすべて政廳筋からの賣物で、

今まで市場に放出された金塊は相當の巨額に達しつゝある模様である。

(ト) 食糧品價格の騰貴　これは前記インフレーションと密接な關係があり、食糧難の原因をなすと同時にまたその結果でもある。政府側は卸賣組合に對して強權を振ひ得ないし又振はうともしないが故に物價政策は常に微溫的で、増大する闇取引は愈々價格を暴騰せしめてゐる。それどころか、ベンゴール州政府の如きは、パンジャブ州で農産物を買上げ、これを買上げ値段より遙かに高い金額で州民に賣りつけたといふことさへ傳へられてゐる。價格騰貴の實勢は既に第一節に於て詳述したから茲には省略する。

(チ) 配給の不均衡　第一章で引用したタイムズ紙調査の各州別需給状態によれば過剰の州より不足の州へ食糧を融通すれば、飢饉は大いに緩和されるわけであるが、それが圓滑にゆかぬ理由として、輸送難の外に各州及び土侯國の割據主義及びそれを統一しない中央政府の放任ぶりが挙げられなければならない。かくして地方的に食糧が偏在してゐる上に、退藏によつて個人的にも偏在してゐるから、不足地域の貧民は徒らに餓死する外ない結果となつた。

(リ) 反英分子の擾亂工作　過去の歴史を顧みれば、食糧危機の深刻化は常に反英運動の先驅をなすの實證がある。曩にクリップス渡印を契機としてガンヂーを指導者とする全國的獨立運動が燎原の火となつて世上の注目を喚起し、英國軍官憲の極端なる彈壓に遭遇して窒息の運命に立到つたが、民衆の潜在的反英氣運が素より終熄すべき筈はない。かくてアメリカの指摘した如く全國的政治不安は澎湃としてみなぎり、或は交通機關のサボタージユ或は悪意に基く退藏等、隨所に顯はれて食糧配給の困難と退藏

傾向が一層助長され食糧危機を益々深刻ならしめてゐる。本年一月二十四日のデイリー・メール紙は會議派を支持する印度人達が單に一儲けする爲のみならず、政府當局を手古摺らせる爲に故意に食料品を買溜めを行つてゐることを指摘した。これは餘りに牽強附會の説で反英運動者流を故意に非難するものと認められるが、國內政情不安が内面的に相當深刻であり且退藏を助長してゐることの事實を裏書するものであらう。

第四節 食糧難を繞る社會情勢

食糧難が深刻化するにつれて民心險惡となり、社會不安も増大するに至つた。既に昨年六月二十二日の同盟パンコック電報は、カルカッタ及びその周邊の軍需工場労働者間に、物價騰貴と買溜め横行とに基く不安が増大してゐることを傳へてゐるが、同年秋には各地に開かれた民衆大會に於いて食糧不足と物價騰貴につき猛烈な政府攻撃が行はれ、ボンベイ、アーメダバッド等に於いては遂に暴動にまで發展したと言はれてゐる。また本年一月にはベンゴール州に於いて、政府所管穀物倉庫の襲撃事件があり、カルカッタ郊外に於いても食糧輸送列車襲撃事件があつて、いづれも民衆警官英兵の間に死傷者の出たことが傳へられてゐる。最近のニュース・テーツマン・アンド・ネーション誌によれば、三月にもボンベイ州に於いて、印度人群衆による食料品店襲撃事件があり、軍隊の出動を俟つて漸く鎮壓された由であるが、六月中旬にはボンベイで開

催された全印度鐵道従業員組合特別會議が、議長ジャティ・ナ・メータの名を以つて、「若し今後従業員の賃銀値上げが行はれず、食糧の供給が改善されなければ、我々鐵道従業員は一齊に罷業を斷行する」旨の決議を發表した。九月末にはカルカッタ市に於いて政廳の無爲無策と冷淡な態度に憤激した飢民達が手に手に旗を持つて街頭に示威運動を展開、これを阻止せんとする警官隊と各所で衝突し、警官隊の發砲によつて多數の負傷者を出したが、パンジャブ州のジャム・カシミール土侯領に於いても同様の騷擾事件が持上つた旨が報ぜられてゐる。

退藏防止や暴利取締りに對する政府の放任振りに加へて、かくの如き食糧不足にも拘らず國外への移出を政府が依然續行せしめてゐることは、殊に民衆の憤激を買つてゐるやうである。又、最近に於いては割當制の實施によつて急速且つ大量的に穀物商人及び集中資本力乏しき回教徒商人の没落を來たし、この方面でも異常なる不満が湧き上つてゐると言はれる。而して、食糧統制を強化せんとする政府の様々な試みは事態を却つて悪化させるに過ぎないといふ逆効果を生じ、激昂せる飢民達は政府の施策を妨害する舉に出はじめた模様である。最近ベンゴール州ノアカリで食糧配給に干渉せんとした二人の監督官が群衆のため暴行を加へられ、又同州の別の町では物價統制を強行せんとした警察官數名が百人に近い群衆によつて襲撃されるに至つたことが報ぜられてゐるが、これらはその例である。またカルカッタでは鐵道に於ける食料品の盜難事件が續出し、最近では平均一日千七百件に達してゐると言はれる。食糧難による餓死に加へてチブス・コレラその他の疫病が蔓延し、それらによる死者も激増するに至り、民衆の不安は一層の拍車をかけられてゐる。

國民會議派の一部煽動家達は、右の如き情勢に乗じて農民の間に非合法的リーフレットの類を撒布し、農産物供出の停止、紙幣受理の拒絶、或は小作料支拂の延滞等を煽動してゐると傳へられるが、これに對しては現在までのところ未だ格別の反響は現れてゐない。併し、頻發する政治的騷擾が食糧難と結びついて情勢は一般に險惡に向つてゐる。

第五節 食糧難を繞る政治情勢

昨年は三―四月のクリップス訪印に次いで、五月のアラハバッドに於ける會議派全印度委員會、七月のワルダに於ける會議派運用委員會、八月のボンベイに於ける再度の會議派全印度委員會、その最中に於ける政廳の會議派幹部大量逮捕、同時に起つた全國的反英騷擾、右に對する回教徒聯盟その他各黨の意思表示等、印度政界は多事であつたが、食糧問題を繞つての政治的動きといふ如きものはまだ見られなかつた。勿論、食糧不足とそれに對する政府の施策振りは中央及び州の議會で問題となり、又、反英騷擾が物價騰貴と食糧不足に基く民心の混亂に乗じて效果的に行はれたことも事實であるけれども、未だ格別注目すべき段階に達するが如き程度には至らなかつたやうである。

本年に入つても、二月のガンチーの斷食を中心として反英騷擾は活潑であつたが、何分にも國民會議派の幹部が悉く獄中にある實狀では、同派の組織的活動は見られず、回教徒聯盟その他の各黨派も徒らなる對立

反目を事とし、會議派の不活潑に乗じて自派の勢力伸張に汲々たるに過ぎない有様であつた。併し其後食糧難が次第に深刻化し、餓死者病人續出し、政府側の施策また捗々しからぬにつけて、政情も亦漸く動搖の様相を呈するに至つた。

即ち、六月七日デリーに開催された全印度回教徒聯盟會議に於いて、アブドル・ハリム・グスマミは政府の食糧政策を鋭く攻撃し、食糧不足の最大原因は印度食糧が反樞軸軍のため搬出される點にあることを指摘した上、これが全面的禁止を要求すると共に、更に割當制の廢止、自由販賣制への復歸を叫んだが、これは従來西亞諸國へ派遣された印度軍の多くが、回教徒である關係上印度食糧搬出に關する政廳の虚偽に満ちた聲明を默認し勝ちであつた回教徒としては注目すべきことであり、全印度に大なる反響を與へたやうである。又、同月十三日に開催の豫定であつたシンド州議會は、出席者極めて少き爲開會不能に陥つたが、これは回教徒聯盟總裁ジンナーを始め同派議員が政府の食糧政策に不満を表して缺席した爲と言はれる。ジンナーの缺席は殊に注目を惹き、政廳ではかゝる回教徒の態度はシンド州の政治的紛糾を増大するものであるとして遺憾の意を表したが、同州の會議派は寧ろジンナーに同情する旨の聲明を發した由である。論者の中には之を目して食糧難を繞り回教徒の民心が漸く英國より離れ、長年反目を續けて來た印回兩教徒間に、反英協同氣運が醸成されんとしてゐるといふ風に見る向もあるやうである。

六月十八日の印度議會は政廳の食糧對策に對する議論で湧き、八月の中央立法會議も同様であつたが、九月二十四日のベンゴール州立法參議會では、ベンゴール州を飢饉區域として宣言する旨の決議案が上程され

た。これは結局二十八票對十二票を以つて否決されたが、政廳に於いては食糧難を繞つて國內情勢が極度に逼迫して來てゐる事實に鑑み、之を幾分でも緩和せんとしてであらうか、九月二十四日ボンベイ州政府をして「ガンヂー翁その他翁と緊密な關係にある國民會議派領袖の見解發表に對しては州政府に於いて檢閲を加へない」旨發表せしめ、更に近く會議派領袖の一部を釋放する意嚮であるとも傳へられてゐる。

チャンドラ・ボースが自由印度假政府を隣國ビルマ領内に設置して獨立運動を強力に開始したことは、會議派の潛行運動にとつて大きな強味であると共に、食糧問題で英國を離反した民心にも影響する所大であり今後の推移は重視される。

第六節 政府當局の對策

食糧不足が問題となり始めて以來、中央及び各州の政府が種々對策を講じ局面緩和のため努力して來てゐることは事實である。

先づ印度政廳は、昨年春食糧不足が表面化するや、各州の協力を得るため四月上旬ニューデリーに食糧生産會議を招集したのを始め、八月下旬と十二月中旬にも各州及び土侯領の代表者を集めて全國食糧會議をニューデリーに開催、本年に入つては七月上旬と十月中旬に之を開催してゐる。また各地の食糧需給を調整するため、昨年十二月商務省内に食糧局を新設し、本年八月には更にこれを強化擴大して獨立の食糧省とし

た。その他、各州の代表者より成る中央食糧諮問委員会（設置の時期不明なるも昨年八月第一回委員会、本年二月第二回委員会が開かれてゐる）を設置して種々諮問してゐるのみならず、國防會議、中央立法會議、全國經濟會議等に於いて決議された食糧對策をも概ね實現に努めてゐるやうである。

州政府の施策は各地方の實情によつて區々ではあるが、特に食糧不足の著しいベンゴール、ボンベイ、マドラス等に於いては、主として刻下の緊急事態收拾のため、可能なる範圍で八方手段を盡しつゝあることは認められる。

かくして、政府當局の執り來つた具體的な食糧難對策及びその實施狀況を簡條的にして見れば左の如くである。

(イ) 増産促進 當局が先づ最初に意を用ゐたのは食糧の増産といふことであつて、昨年四月の食糧生産會議はその意圖の下に開かれ、種子、肥料の給與、水利の改善、公租公課の減免等農業生産力擴充策を決定、實施すると共に輸出不能となつた棉花等の作物に代へ食用作物植付を計畫した。殊に當時恰かも短纖維棉花のストックが増加してゐたので、國內に於ける棉作地の中五百萬エーカーをも食糧生産に振り向けることとしたのであつた。併し、印度農民の原始的な農耕方法、肥料及農具の缺乏、灌漑施設の不足等より早急の増産は實現困難で當面の急場を救ふには役立たず、加ふるに政廳の施策も不徹底なため例へば棉花の價格が其後騰貴するや、農民の中には食糧生産を止めて棉作に復歸した者が少からず、本年に至つては棉作地が昨年に比し五パーセントから十パーセントへ増加してゐると言つた有様である。併し、本年八月下旬の情報

によれば、ベンゴール州政府は三年計畫で州内の水田擴張工作に乗出し、この費用七百二十萬ルピーの中半額は中央政廳が負擔する筈とのことであり、増産政策はなほ續行されてゐる模様である。

(ロ) 退蔵防止 食糧難が賣惜みと買溜めに基くところが多いといふことの外に配給制度を實施する必要から政府は早くより退蔵防止に努めてゐる。昨年三月バンジャブ州に小麥が不足するや、首府ラホールでは許可された量を超える小麥貯蔵に對し強制沒收を行ふ旨布告されたが、同月末中央政廳も量の大小を問はず國內に貯蔵されてゐる小麥を政府に申告すべしといふ命令を發した。次いで本年一月にはボンベイ州政府が州令を以つて二十五ポンド以上の小麥を貯蔵する場合は當局に届け出ること、並びに許可なくして賣買を行はざること布告、二月には中央政廳が法令を以つて今後食料品を貯蔵する者は即時逮捕され全財産沒收その他の重罰を課せられる旨布告し、五月にはベンゴール州で食糧調査特別委員会が組織され、州内の在庫食糧の調査が行はれたが、同州では更に九月に至つて食糧統制違反を密告した者には賞金一千ルーピーを與へるとの布告を發した。七月上旬の全印度食糧會議に於いても買溜めに對する防止策の強化が決議されてゐる。かうした當局の躍起の對策にも拘らず、退蔵は依然として行はれてゐるやうである。

(ハ) 價格統制 食料品價格の暴騰と闇取引の横行が食糧不足を相互的に助長してゆく傾向に鑑み、政廳では昨年三月小麥の最高價格を設定したが、これは却つて小麥の市場への出廻りを阻止し、新聞紙上や議會に於いて非難的となつたので、結局本年二月に至つて統制解除を發表するに至つた。ベンゴール州に於いては政府に米を多量保有することによつて米價安定策を講じたが、これも完全に失敗した。その他、頻繁

なる暴利取締令も何等効果を奏してゐない。併し、その後も政廳では價格統制に腐心し、五月には新課税制度を実施して殷盛を誇る軍需工場方面へ重點的に課税したり、八月にはインフレ抑制令を公布して食糧乃至穀物一般に關聯する資金の貸付を禁止したりしてゐる。

(二) 輸入及び移入 小麦の價格統制は結局失敗に歸した爲、統制値段を撤廢すると同時に政廳は土侯領その他生産過剩地方に直營の食糧買上機關を設け、餘剩食糧の買上げ及州外輸出を獨占せしめ、買上げた食糧を不足地域に振向けることにした。またベンゴール州の如きは首相自ら近接諸州に赴いて交渉し、食糧の移入を圖つてゐる。本年二月上旬の中央食糧諮問委員會に於いて商務長官サルカルは、過剩生産地域より不足地方への食糧輸送費を政府の負擔とする案を提議したが、それが實現を見たか否かは傳へられてゐない。併し、八月の中央立法會議に於ける政廳の答辯によれば、過去三ヶ月間毎日平均百九十九ヶ車の食糧がカルカッタ地方に到着してゐることであり、九月下旬のロイター電報も、現在毎日一千七百トンの食糧がカルカッタに入つて居り、八月十三日以降現在までに約五十輛より成る小麦及び麥粉の特別列車が十三列車パンジャブ州よりカルカッタ市に入つたと報じてゐる。また政廳は二月中旬の發表で船腹難を克服し國外よりの穀物輸入も行ふと公約してゐるが、これについては前記の通り三月中旬までに十萬トンの小麦が濠洲より輸入されたことが知られてゐる。

(ホ) 輸出停止 本年一月七日商務長官サルカルはベンゴール州商業會議所例會に於いて、セイロン島以外の諸國に對する米穀の輸出を一切中止したと言明してゐるが、果して如何なる程度に實施されたか疑問

である。それに米穀の輸出のみを中止しても、小麦の輸出を續行してゐるのでは効果はない。八月の中央立法會議でも、食糧の對外輸出問題が論議され、政廳はその取締りを改めて公約してゐる。

(ハ) 配給制の實施 政廳は既に屢次の食糧會議に於いて、各地方に於ける食糧の必要量現在の供給状態、價格等を検討してゐたが、本年五月末より先づボンベイ市に小麦及び米の切符制を實施、次いでマドラス、聯合州、オリッサ等の各州の都市に配給制を實施し、十一月からはカルカッタ市を含む約七十の都市に實施の豫定と言はれる。而して八月にはボンベイに配給係官の中央訓練所を設置し、次第に配給制を全印度の都市に擴大せんとしてゐるやうである。併しその配給量は大人一人に對し一日一ポンドであり、これでは餘りに不十分であるとして、非難の聲々々たるものあり、七月の全印食糧會議に於いて早くも割當量の増加が決議されてゐるが、増加量及び實施状況については何等報せられてゐない。

(ト) 輸送難の緩和 食糧難の一部の原因が輸送難にあることは當局も十分自覺してゐるので、(一)の「輸入及び移入」の項に於いて述べた如く、相當の努力を拂ひ、實效も擧げてゐるやうである。七月の全印食糧會議に於いても「食糧運搬に對する鐵道運輸の改善」が協議されたが、九月末のロイター電報によれば、「六月二十日より七月十七日までの四週間にカルカッタ市内に持込まれた穀類は八萬二千七十トンに達し、前年同期の三萬二千六百トンに比すれば非常な増加である」といふ。

以上の外政廳では消費節約を勸奨したり、一般民衆及び食糧取扱者に政府を信頼せしめるやう地方當局に

通達したりしてゐるが、平時に於いてさへ飢餓の一步手前にゐた民衆にとつては消費節約の餘地などあるべくもなく、また餓死者續出する現狀に於いて政府を信頼せよと叫んだところで効果は期待出来ない。

去る九月末全印度食糧政策委員會（一名グレゴリー委員會）は政廳に對し食糧對策についての勸告案を提出し、「食料品價格の統制には印度政廳が少くとも五十萬トンの食糧貯蔵を手持する必要がある、従つて政廳は差當り五十萬トンの食糧を輸入し別に過去五ヶ年間の食糧總輸入量の年平均數量たる百萬トンを海外より毎年輸入することが必要である」と強調したが、委員會は殊に五十萬トンの中央貯蔵は價格統制實施の爲絶對必要とし、船腹不足の事情は察するも印度人一人當り食糧消費量は極めて低く之を減少する餘地なきことを附言し、更に政廳が「食糧政策について最終的な權限を握り、各州政府の決定を覆し、乃至各州政府の決定を待たずに機宜の措置を講じなければならない」旨をも勸告してゐるが生産過剰な州及び土侯領中には自己のための貯蔵に汲々として政廳の供出命令に服さぬものが少からず、四―六月の間に全印度の過剰地域に割當てられた供出量は百四十五萬トンであつたにも拘らず、實際には五十七萬トンが供出されたのみといふ状態であつた。

九月廿八日のマンチヌスター・ガーディアンは印度がその生産量を一割又は二割増加するか或は年々の不足量五百萬トンを何時にても輸入し得るとの安心を與へない限り問題の解決は困難である、しかし前者は印度農業經營の現狀に省み甚だ困難で、後者は戦争繼續中實現は不可能であるとの結論を下してゐる。

尙その後の報道には印度政廳は十月十三日より十六日に亘つてニューデリーに第四回全印食糧會議を開催

一、食糧の分配に關するグレゴリー委員會の勸告案採擇

一、食用穀類の過剰各州に於ける穀類の買入れに就いては印度政廳は干渉しないが、當該各州政府に於いてはその都度印度政廳に通告すること

一、食糧の値段に就いては或る程度の統制を加へること

の諸項を決議したが、二十二日の同盟リスボン電報によれば、印度政廳は特にベンゴール州の食糧危機打開のため遂に買溜退治に乗出し、先づ總督令を公布次いで二十二日施行細則を公布、して、商人、生産業者並びに輸入業者に對し、重要在庫品を悉く當局に申告するやう傳達した由であり、更に十一月一日からは非常食糧配給計畫を實施する段取りと發表した。また二十七日及二十九日の同盟電報によれば新總督ウエーヴェルは二十六日カルカッタに赴き飢饉狀況を視察すると共に州政府當局と熟議した結果、食糧の輸送並びに非常用の貯蔵を行ふため軍隊の協力を命令した。かくて飢饉對策に今や狂奔し始めた印度政廳は更に十一月八日よりニューデリーに中央立法會議を開催したが、その模様にはまだ報道がない。

一方、印度事務相アメリーは十月二十八日日本國の議會に「一九四三年印度の食糧狀況」と題する白書を提出したが、これは印度に於ける飢饉の慘狀に對し英國政界に於いても漸く議論沸騰するに至つた爲、當局の施策について釋明的報告を行つたものに過ぎない。白書の内容は左の項目に觸れてゐると傳へられてゐるがその詳細は未だ明かでない。

第一節 八月九日印度財務長官アジズル・ハクの印度中央立法會議への報告

第二節 従来の食糧政策、現在の實狀を検討し、戦時食糧政策につき勸告案を提出するため一九四三年

七月任命された食用穀類政策委員会の報告

第三節 全印食糧會議で發表された印度政廳の食糧政策

第四節 ベンゴール州内現在の食糧事情

第五節 印度全般の食糧事情

第七節 英本國の態度

印度に於ける今次の食糧難は勿論その當初より英本國に傳へられてゐたが、當面の戦争遂行に専念してゐることの外に、印度問題に就いては獨立運動への對策が第一の關心事で、食糧難の如きは極めて冷淡に看過され、たまたま議會で質問する者があつても、政府は甚だお座なりな答辯でお茶を濁し、議員側も別に追及はしないといふ風な有様であつた。併し、この七月以降ベンゴール州その他の慘狀が傳へられるに及び、漸く英國朝野でも重大視し、九月の議會再會と共に印度事務相アメリーの許には質問が山積するに至つたと報ぜられた。アメリーは之に對し九月二十三日の下院で一括答辯したが、その内容は依然としてお座なりで食糧難を誘致した主要原因としての不當な食糧輸出、激増せる駐屯軍への徵發、交通機關の徵用等の事實には一言も觸れず、専らビルマからの輸入杜絶と印度人の退藏及び地方行政機關の對策失敗等の所爲にしてその

責任を回避するの態度に出で、事態改善の各種措置が印度全般に亘つて採用されてゐる旨を高調し、既にボンベイその他の都市に配給制を實施したこと、七月に政廳が任命した全印度食糧調査委員会の勸告案が二十日に總督の許に提出されたので之を基礎にして近き將來に更に具體的な措置が講ぜられるであらうことを體裁よく報告したに過ぎない。

アメリーの説明が終るや、労働黨のソレンセン、自由黨のグレイアム、ホワイト等が交々立つて印度政廳の無爲無策を攻撃し、就中ホワイトは「果して當局はベンゴール州に於ける恐るべき事態を打開し基本的な食糧を確保する爲に現在印度の内外に於いて執られてゐる措置に満足してゐるのか、若し他の方法で所期の成果を擧げ得ぬ場合には、特に買溜めの著しい地方に於いて食料品の輸入と分配を斷行する意向はないか」と質問、また労働黨のジョン・マックは「買溜めが主要原因であるから食糧徵發を斷行してはどうか」と質問したが、アメリーは「印度政廳は既に一ヶ年間に亘り多量の食料品を輸入してゐる、食糧徵發についてはベンゴール州政府が既に廣範圍に實行してゐることを了解してゐる」と答辯した。次いで保守黨のアスター夫人、労働黨のシルヴァー・マン等は印度の飢饉が英國のため不利な宣傳の種になつてゐる點を強調して、その見地から食糧不足解消の急務を説いたが、アメリーはその責任を州政府の印度人官吏に轉嫁する法理論を振廻し、「印度の各州には自治的な内閣があるのだから、食糧の不足に就いても憲法上第一の責任は各州政府が負はねばならない」と述べ、之に對し労働黨のシンウエルは「英國政府が印度國內の食糧飢饉に就いて責任を回避するのは却つてよくない、憲法論は姑く別として十分責任を自覺し、飢饉解消のため出来るだ

けの手段を講ずべきである」と極めつけた旨が報せられてゐる。

一方新聞雑誌方面の論評を見るに、スペクテイター紙が「今回の印度の飢饉の責任は大部分十二の自治諸州にあることは明白である、被害の最も大きいベンゴール州でも政權を握つてゐるのは印度人の内閣であるから、純粹に印度人のみに關する事柄は彼等が責任を負ふべきである」と言ひ、ニューキヤツスル・ジャーナル誌がベンゴールの飢饉は印度人自身の責任である、ベンゴール州は印度に於いて最も肥沃な地方であるが、此所に今日の如き飢饉を招來したのは印度人の無能と貪慾とが原因してゐる。同州の印度人民を養ふ責任は同州の印度人内閣の責任であるが、彼等は危機が切迫するまで事態を傍觀し中央政府へ援助の申出さへ断つてゐた」と論じてゐる等、概ねアメリカの強辯に追隨してゐる狀況が顯著である。かうして印度の慘狀を印度人内閣の一方的責任に歸せんとする態度は、印度に對する英國の支配を合理化し、あくまでも之を繼續せんとする魂膽から出たものであることは言ふまでもない。

併し、元マドラス州警視總監ナヤールズ・カニングムは十月四日タイムズ紙に寄書して「分配の不備、買溜め、闇取引等は食糧不足の場合に何れの國にも起る現象で、決して印度に限つたことではない。右の事情があればこそ食糧配給統制が益々必要なのであつて、放任政策をとれば貧民は餓死するのみである。印度の憲法によれば印度政廳が各州の食糧政策に介入し得ることになつてゐるのだから、英國人はベンゴール州に今後如何なる事態が持ち上らうとも、歴史の前に責任を逃れることは出来ない」と論難し、また曾て印度軍醫療班として従軍したことのあるホレイス・アレキサンダーもマンチェスター・ガーヂアン紙に寄書して「責

任のなすり合ひよりも何とかしてベンゴール州内に食糧を送り届けることが急務である」と述べて當局の冷淡さをこき下ろしてゐる。新聞紙も、先づマンチ・スター・ガーヂアン紙が社説に於いて前記アレキサンダーの書翰を取上げ、「船腹難は或る程度緩和したのだから、英國政府としては此の際萬難を排してベンゴール州に食糧を輸送せねばならない」と論じたのをはじめ、ニューズ・クロニクル紙は「アメリカがベンゴール州飢饉の責任は第一に同州政府にあると述べたことは全く出鱈目であり、印度は決して獨立して居らず、凡ゆる意味で英國に依存してゐる。戦争努力に關聯して印度事務相は何等躊躇する所なく印度に對し指令を發してゐるではないか。如何なる權限がベンゴール州に與へられてゐようとも要するに空文に外ならず、飢饉の責任は印度政廳が負はねばならない」と痛烈に論難し、ニュー・ステーツマン・アンド・ネーション誌も同様の見解を披瀝するに至つた。更にもまた英本國ではないが、印度に於ける英人を代表するステーツマン紙も九月二十四日左のやうに論じてゐる――

食糧飢饉の最も重要な原因は中央及地方政府が見透しを缺いたことである。現在の飢饉は一九三〇及三一年の政治的騷擾以來の最悪且最も非難すべき行政的壞亂で、責任は英國の當局及直接指揮下にある當地の代表者にある。當地英國人は同胞たる印度人が飢饉に死するのを見るときに耻辱を感じざるを得ない。解決策は地方政治に於ける黨派對立を解消して州政府の活動を妨害しないことにある。戒嚴令施行も屢々言はれるが、印度軍隊はかゝる責任を負擔することを欲する模様がない云々。

ステーツマン紙のかやうな論評などを見るときは今次飢饉の真相は英國の傳統的隠蔽政策の背後に傳へられるよりも遙に深刻なものがあるやに想像されるのである。かやうな形勢に對し、食糧相ウィルソンは五日のト院に於いて「本國向け食糧の一部を印度に振り向ける」旨言明したと傳へられる。

なほ英國政府は九月二十七日労働黨下院議員クレメント・デーヴィスを印度救済委員長に任命したことが報せられてゐるから、印度の飢饉民衆救済についても、若干の配慮をなすべき必要に迫られてゐるやうである。

第八節 第三國の態度

ベンゴール州の食糧不足が遂に純然たる飢饉の段階に達した去る八月、カルカッタ市長は折柄クエベックで會談中のルーズウエルト、チャーチル兩名に電報を送り、速かなる救援を要請すると共に米國の武器貸與局に對しても食料品の送附方を要請した。併し、米英の兩首腦が之に對し何等かの配慮を行つたといふ如き事實は全然傳へられてゐない。また武器貸與局當局は九月二十三日英紙の特派員に對し、カルカッタ市長からの援助要請を接受した事實を認めたが、「我々はカルカッタ市廳と交渉するわけにはゆかない、食物に對する要求は英當局を通じてなさるべきである」と言ひ、若し英政府の手を通じて援助を懇請された場合は如何との質問に對しても、「これは英國の問題である、英國は食物を持つて居り、我々より遙かに早くそれを印度に送り届け得る、例へば南阿から持つて行つてもよいではないか」と極めて冷淡な應答を示した由である。

る。多數の派遣軍を印度に送り、そのこと自體印度の食糧難の一因となつてゐる米國として、右の如きは誠に冷酷な態度であると言はねばならない。

重慶政府當局は英國政府への氣兼ねから印度政策には觸れることを避けてゐるが、最近新聞界が、飢饉を繞り英國の印度政策に明らかに非難の矢を向け始めたことは注目されてよい。例へば十一月五日の新民報はその報道に「レオポルド・アメリカは老獪にも印度の飢饉につき陳辯」といふ皮肉な見出しを附して居り、同日の大公報は印度の食糧危機は極めて重大であり、反樞軸側の世界戦略の遂行にも影響を及ぼすかも知れない。新印度總督ウエーヴェルも東亞反攻を呼號する前に先づ攻撃據點として印度の國內を固めることが大事である。即時ベンゴール州の食糧危機を打開することが刻下の急務である」と述べ、英國政府に警告してゐる。

一方新興ビルマ國政府は九月末バー・モー國家代表の名を以つて、印度の飢饉地帯に對し米を提供する用意ある旨を言明、英國政界筋にも少なからぬ反響を呼び起し、労働黨の領袖ストラポルギーは「英國政府はこれの際ビルマ政府の申入れを欣然受諾すべきである」と進言した旨が報せられてゐる。

また、これは第三國とは言ひ難いが、印度獨立聯盟總裁チャンドラ・ボースも、食糧不足に悩む印度の同胞救済のため十萬トンの米を提供することとし、九月中にラジオを通じ再三英國政府に呼びかけ、救済米運搬のため船舶を東亞に派遣するやう懇懇したのであつた。英國側はこれに對し素より何等の應答もなす筈はないであらう。

第九節 今次飢饉の特性と批判

印度に於ては飢饉は決して珍しいことではない。過去二百年間に於いて十八世紀には十回、十九世紀には二十四回、二十世紀に入つて三回に及んでゐる。而して最近五十年間の主要な飢饉の歴史を通観すれば、

(一) 一八九一年より九二年に亘るものは飢饉の地域五萬平方哩に亘り七百萬の人口に影響したとの事であつた。

(二) 一八九六年より九八年に亘るものは所謂デツカンの大飢饉として最も世に顯れ四千七百五十萬の人口に影響し、悪疫の流行之に伴ひ慘憺たる光景を呈したもので、當時政府は救済の爲二千萬磅を支出したと云はれる。しかも本飢饉は革命の英傑テイラックの利用する處となり全印度に亘つて反英テロ行爲が横行するに至つたものである。

(三) 一八九九年より一九〇一年に亘る前回に引續いての飢饉に於いては二千五百萬の人口に影響し八千萬磅の損害と推された。當時の總督カーゾンは國內不穩の形勢に鑑みて各地方を視察巡遊し、救済に従事し、地租、所得税の軽減をも行つた。

(四) 一九〇六年より七年に至る聯合州南部及中央州東部の飢饉に際しては日露戰爭の影響を受けたるテイラック一派の反英運動が革命的テロリズムにまで發展した時である。

(五) 一九一三年より一四年に跨る聯合州の飢饉は歐洲大戰開始の前夜に當り、印度革命史上有名なベングール州分離問題解決の後を受けて一般に不穩の空氣漲つてゐた時であつた。

(六) 一九一八年より二十一年に至るものはボンベイ州、中央州、ハイデラバッド及マドラス州に跨つたが、當時はガンデイ出現による大不服従運動最中に當り物情最も騒然たる時代であつた。

右の如く過去の飢饉が多く反英運動に利用され、大體に於て表裏の關係に在つたことは興味ある事實である。一般印度人は飢饉の發生を以つて英國帝國主義の貽した現象だとしてゐるのである。英國統治以後の飢饉が英國資本主義の導入による村落自給制の崩壞により激成されたものであることは既述した所より容易に推知し得る筈である。

さて今次飢饉について見るに、その根底たる穀類の量の不足自體の問題は天候不順等の自然的條件、ビルマ喪失、船腹不足等による輸入の杜絶、軍需による徵收等の諸原因の競合により發生したもので、そしてそれが飢饉の状態に立到らしめたものは悪性インフレーションその他印度戰時經濟の混亂による配分の不圓滑である點に、從來と著しくその性格を異にするものがある。従つてその責任は英國が印度をして戰爭遂行上の兵站基地たらしめた人爲作用にあるものと云ふべきで、印度人の非難は専らこの見地から出發してゐる。戰前に於ける穀類の輸出入状態を見れば、印度は年々百五十萬トン内外の米を輸入し、三十萬トン内外の小麥を輸出してゐたから、差引約百二十萬トンの不足は先づ想像される。そして一九四二年度穀物供給高(前頭商務長官説明参照)を一九三七年度のそれに比較すれば約三百萬トンの減收となるから兩者を合計すれば約四百二

十萬トンとなり、供給高の約一割に當る。これに軍需を加へても大約六七百萬トンと云へば略真相に近い不足量と云へるのであるまいか（第二節所載マンチエスター・ガーディアン紙所報ともこの數字は大體符合すると考へられる）。然しながら本來印度の食糧生産絶對量は老大であり、その一割の程度の増減は印度の過去の歴史に於いて屢見る處である。之を以て直に飢饉を惹起する原因と見ることはどうかとも思ふ。飢饉は寧ろ局地的に供給が激減し、之が補充が充分ならざる場合に於いて發生を見ることが多い。この意味に於いてインフレの結果による物價の昂騰と之に伴ふ投機的買溜め賣惜み、乃至は戰時輸送の困難が局地的供給を激減せしめたことは結局貧困農民をして極度の窮迫に陥れたのであり、更に之に加ふるに軍需の要求は民需を度外視して買上げを強行し、以つて困難を倍加せしめたものと云ふべきである。商務長官が約五百萬トンを以つて行衛不明の數字としてゐるのは全く問ふに落ちず語るに落ちの類であらう。

今次飢饉の第二の特色はその發表される數字が區々にして、幾多の撞着を含み、真相の明かならざる點である。換言すればその状態は實際發表される數字以上に深刻なるものあるやに想像せられる點である。真相の發表は結局に於いて國內の動搖を激成し軍隊士氣の上に影響するところあるを慮り、數字の辻褄を合せて國民を瞞着し以つて戰爭への協力を求めんとしたのである。過去の歴史に屢々見らるる暴民の蜂起に關しては、國民會議派に對する彈壓を強化せる今日に於いては氣勢甚だ擧らざること素より當然であるが、ウエーヴェルは軍隊の協力を命令せることによつてその消息の一端を窺ふに足るものがある。政府の企圖する處は如何にして軍需の充足を確保すべきや、將又その輸送を圓滑ならしむべきやに在つて、窮民の真相は今日の

段階に於いてはなるべく隱蔽を得策と見てゐる。でないであらう。

第三の特色は今次飢饉の持続性である。右に述べた如く、今次飢饉は單なる生産の自然的條件によるものでなく、戰時經濟機構の不圓滑にその根本の原因ありとせば、現在の如き政府の微温的努力によつて事態の改善を見ること困難にして將來に對し持続性を有するものであることは凡そ豫想に難からざる處である。棉作を穀作に轉換することの可能性はある程度まで容認されるところも、それは相當の歳月を必要とするであらう。穀物供出の強制、公定價格の設定、乃至は配給制度の實施は事印度財閥に影響するところ少くないであらうが、印度に於いて、政府が國民の協力を求めんとする所は一般大衆に非ずして専ら財閥に外ならぬ。英國が印度人に減私奉公を要求することは不可能である。その協力を求めんとするに當つては彼等に對するある程度の利益擁護は必然である。供出の強制、公定價格の設定等の如きは既にその実績が擧がつてゐない。また配給制度の實施は印度の實情に於いて、その完璧を期することは出来るべきものではない。しかも悪性インフレによつて拍車を掛けられた投機的行爲は到底抑壓し得る性質のものでなく同時に軍の要求引續き熾烈なるものありとすれば食糧の危機は戰爭の持續する限り悪化こそすれ終熄するものとは考へられない。然しながら茲に注意すべきは今次食糧の危機につき述べた人爲的作用は戰爭と云ふ非常事態に於いて當然豫期さるべきもので、印度のみその例外をなすべきものでなく世界各地共通の現象と見ることも出来る點である。

殊に吾人の最も關心を拂ふ所は今次飢饉に際し英國が印度に於いて重大なる政治及經濟の混亂を結果する

ことなく、所期の軍需と充たし得るや否や、換言すれば、その抗戦力に如何程の影響を與ふべきやに在りとすれば、前記の如く生産絶對量に對する一割餘の不足が誘因となつてゐる今次飢饉を過大評價することは尙更禁物である。商務長官が全人口の消費量を三千八百五十萬トンと推定し四百萬トンの剩餘ある筈だと云つてゐるのは消費の節約、退藏の防止を看板として軍需の確保を計らんとした決意を示せるものと解すべきは至當であり、更に窮民の一部を犠牲にしても現下充實せる兵力に物を云はせて難局を押し切らんとすることも多言を要しない。

更に商務長官が印度各州に於ける食糧の過不足に關する數字を並べその差引不足高を百五十萬トンと計算し、以つてビルマ喪失による輸入杜絶の數字と一致せしめてゐることに特別の注意を拂ふことは必要である。英國印度相アメリーも亦之に呼應して印度の食糧問題解決はビルマ奪還まで不可能だと説明し、更に前記九月末全印度食糧政策委員會が政府に對して建議した戦時下印度の食糧對策も食糧百五十萬トンの海外よりの輸入を骨子としてゐる。當時英國及印度に於いて盛んに雨期明け後のビルマ奪回作戰を呼號した事實と相照合するときは、英印度當局が國民の注意をビルマ作戰に轉換せしめんとして飢饉を利用し、その原因を大東亞戦争に轉嫁することによつて問題を有利に導かんとする苦肉の策を弄してゐるものと疑はれるのである。

第十節 大東亞戦争との關係

さて、印度に於ける現下の飢饉は大東亞の戦局に對して如何なる關係を有するであらうか。

ビルマ奪回乃至東亞に於ける反攻を目指して着々軍備を増強してゐる英米軍にとり、その兵站基地たる印度にかやうな飢饉が生じたこと、殊に對日戦の直接前進基地たるベンゴール州の事態が最も窮迫してゐることは、確かに大きな打撃であるに違ひない。それは先づ彼等の士氣を相當動搖せしめてゐるであらうし、食糧供給の不圓滑、工場労働者の能率低下等に於いて、戦力充實にも若干の支障を來たしてゐるであらう。併し、それらによる彼等の戦力減退を過大評價することは危険である。現在までの所では食糧難は恐らく、英米軍の戦力増強にさまでの影響を與へてゐないと見るのが適當のやうである。否寧ろ彼等が民衆の困窮を犠牲にして交通機關を徵用し、或は民需物資を極度に搾取したが故に、飢饉が生じたと言つてもよい。戦力の擴充は豫定のコースを辿つて滯滞なく行はれて來てゐるものと考へられなければならない。況んや彼等は軍隊徵募の爲飢饉を却つて利用しつゝある。英國にとつては、印度の保有乃至ビルマ、マレーの奪回こそ當面の關心事であるが、印度人民衆が幾萬人餓死しようとする、そのこと自身は殆ど問題ではない。

尤も印度に於ける英米軍の戦力に一抹の暗翳を投ずるものは食糧問題と相關聯した政治的な不安である。會議派を中心とする反英獨立運動が印度を戦時態勢化し、兵站基地化せんとする政廳の努力を阻害すると共に、軍需工場に於ける怠業乃至罷業を誘致し、或は暴動化して交通機關その他各種の設備を破壊することである。かやうな罷業や暴動事件は周知の通り、昨年以來夥しい數に上り、當局の極端な彈壓に遭遇したがその餘燼が決して消え去つた譯ではない。而して、食糧問題はこの政治的不安と連結し特殊の様相を形づくる

時、はじめて敵側の後方擾亂に役立ち、英國側にとり重大なる脅威となると言ひ得られるであらう。

既に昨年以來ベンゴール、ボンベイ、マドラス各州に於いては、食糧暴動の勃發したことが傳へられてゐる。併し、それらは何れも極めて小規模で且つ發作的なものに過ぎなかつた。又それらは反英獨立運動とは殆ど關聯がなかつたやうである。食糧暴動は人間の不可欠的必要より生ずるが故に深刻ではあるがそれだけに無統制な自然發生的な暴動に終り易い。従つて、會議派としてはこの種の暴動を十分に組織し指導するところが肝要なのであるが、如何せん昨年八月以降會議派の幹部は悉く政廳のため逮捕されて獄中にある。かくして一般大衆の組織的指導は期待されない憾がある。たゞ茲に吾々の意を強うするものは民衆を指導する上に幾多の試練を重ね來つたチャンドラ・ボースの自由印度假政府の存在することである。彼の地盤はベンゴール州である。最近英米軍はビルマ國境に於いて第一線より印度兵を退けてアフリカ土民兵に代位せしめたと傳へられ、又前顯の如く最近に至つて英國側が食糧危機に對して相當再檢討を加へ來つた模様であることは、自由印度假政府の出現と關連して考ふれば、英國側に於いては形勢最も險惡なるベンゴール州に少からず神經を尖らし來つたものと推察される節もある。飢饉を通じて顯れてゐる印度食糧經濟の脆弱さと益々潜行的深刻の度を増しつゝある政治的不安が作戰の上にも相當の反響を及ぼすことを否むことは出來ないであらう。要は今後の大東亞戰に於いて在印兵力が如何に弱體化されるかにその運命が懸けられてゐると云ふべきである。

昭和十八年十二月二十七日印刷 昭和十八年十二月三十一日發行	財團法人世界經濟調查會 非賣品
不許 發行兼 中尾謹三	著作兼 東京都麹町區大手町二ノ八
製 印刷人 山縣精一	東京都神田區神保町三ノ二九
發行所 財團法人世界經濟調查會 東京都麹町區大手町二丁目八番地	

日本出版會員番號214026番

雙本控

何第 號

967

南

306

號

年

月

日

書名

印度之食糧難 (

)

著者

世界經濟調查會編

要入

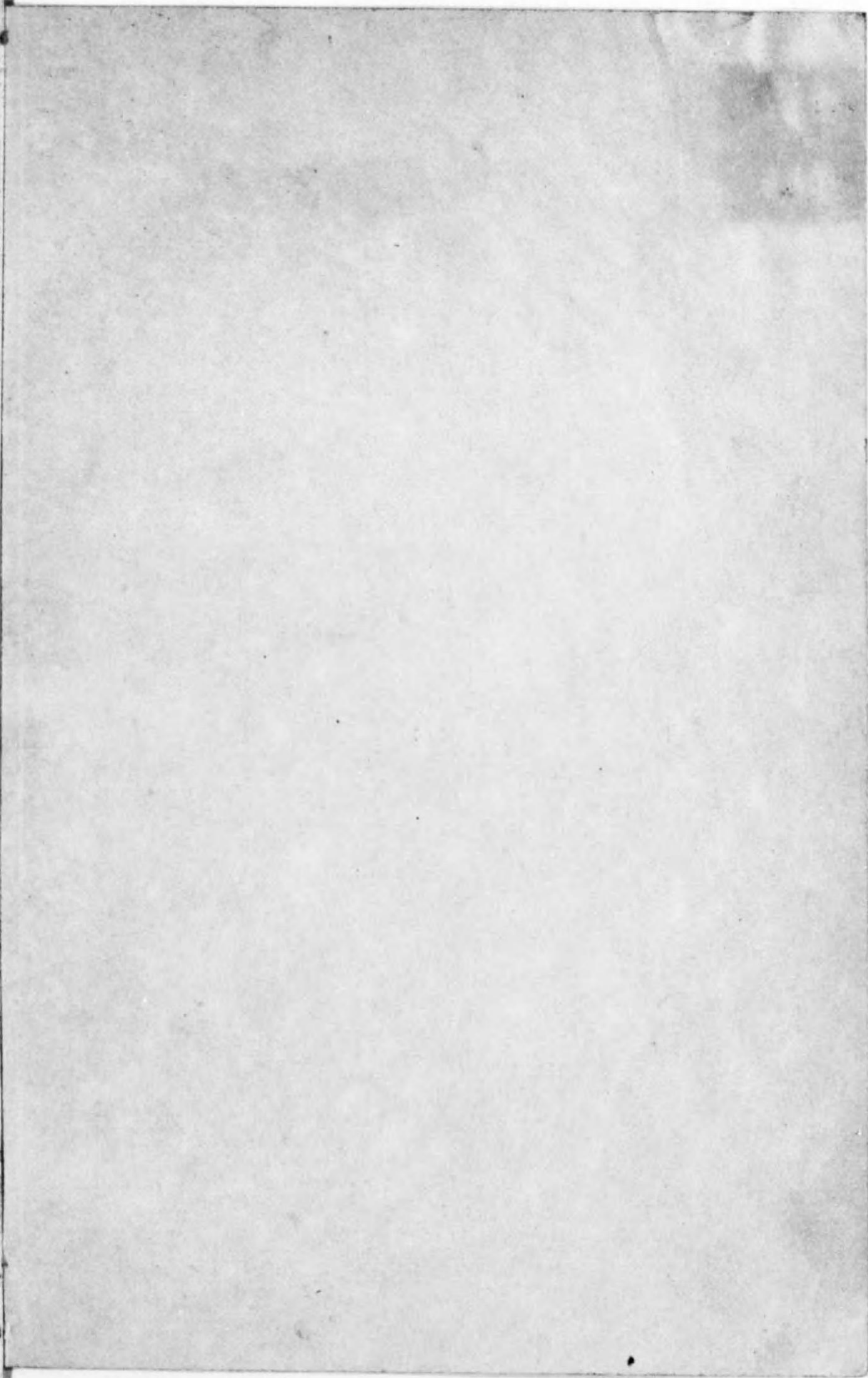
19年2月23日

備考

印



967
306



終